書評

大戸千之著『ヘレニズムとオリエント——歴史のなかの文化変容——』

春田晴郎

本書は、セレウコス朝を主な対象に「ヘレニズム」研究を続けてこられた大戸千之氏の初の単行本である。また同時に本書は、訳書を除けば、「ヘレニズム」を正面に据えた我が国初の研究書といってよいだろう。

本書でとりあげられた地域・時代は、我が国の伝統的な西洋史・東洋史の区分では、ちょうどはざまにあたっている。評者は、西洋史側の出身ではなく、ギリシア語史料にも暗い。そのためギリシア文化の常識をわきまえない評があるかもしれないが、御容赦願いたい。

本書の構成を以下に、まず示す。

まえがき
第一部　ヘレニズム研究の再検討
第一章　ドロイゼンのヘレニズム概念
第二章　都市建設とヘレニズム
第三章　都市と従属民——プリエネのベディエイスについて——
第四章　農民身分の問題
第五章　セレウコス朝の支配とオリエント人——アンティオコス三世時代の場合——
小括
第二部　ヘレニズム時代における文化変容
第一章　史料と解釈の問題
第二章　リュキア——クサントスを中心に——
第三章　リュディア——サルデイスを中心に——
第四章　パレスティナ——ユダヤ人とヘレニズム——
第五章　バビロニア——ウルクを中心に——
むすび

第一部第二—第五章、第二部第二—第三章は、既発表の論文を骨子としている。これらについては、内容上の変更はないが、近年の研究の進展をふまえた加筆が行なわれ、単行本としての一貫性をもたせるための部分的組みかえも施されている。

それでは、以下、内容を要約して示す。

まえがき——「ヘレニズム」は、近代歴史学の生み出した諸概念のなかでももっとも早い時期の例に属する。にもかかわらず、「ヘレニズム」概念の曖昧さから、その理解には対立・混乱が生じたままになっている。本書は、そういった誤解・混乱を改めていこうとする追究の一つである。

第一部第一章――ミトフォードの先駆的研究などを受けついだ、ドロイゼンの研究の画期的な点は、「ヘレニズム」という語を正面に押し出したこと、そしてその本質を東西民族の混淆ととらえたこと、の二点である。また、彼の宗教的な問題意識、ギリシアの異教世界からキリスト教の興隆を説くこと、は一貫していた。しかし彼自身、この問題の解明の困難さにほどなく気づいたものの、新たな解答を与えることはなかった。ドロイゼンの仕事は大きなインパクトを与えたが、その後の研究史の傾向としては、材料不足の「東西融合」論よりも、ギリシア文化がオリエントに普及拡大していったことを、まず主流として評価しようという方向に進んできた。このような考え方がどこまで正鵠を射ているか、ギリシア文化の影響・大きさをどのように評価するかという論理・視角・方法について通説は妥当であるか、第二―第五章で再検討する。

第二章――セレウコス朝による都市と軍事植民地の建設がオリエントのギリシア化を推進した、という通説を、新来のギリシア・マケドニア人と土着民はどのような形で共存することになったのか、という視角から検討する。カリアのストラトニケイアなどの事例から、以下のことが結論できる。共存のあり方は各地各様――土着の住民・住地をポリス内に組みこんだシリア四大都市、既存の自治組織を許容しつつ自らまたそれに参加したストラトニケイア、民族による区別が存在したシピュロス山近くのマグネシア、など――であるが、土着人との共存のあり方を慎重に考慮せざるをえず、土着人以外の非ギリシア・マケドニア人を無視することもできない。そして、総じて、セレウコス朝が自由にことを進められた場合は少なく、融和の果実は容易には実らなかったようである。

第三章――ギリシア都市と土着従属住民の関係について、小アジアの都市プリエネと先住土着民とみられるペディエイスをとりあげて検討する。前三〇〇年前後の碑文などの分析からみると、ペディエイスは、ひろく近隣の平野住民一般を指していて、一部はプリエネに帰属していたが、残りはプリエネの支配がゆきとどかず自立的な性格をもつ特別な地域を形成していたらしい。このような一般的な名称の使用は、プリエネの支配の未定着を示している。こうした土着民の地位を最終的に体制内に確定する過程は、かなりの時を要したように思われる。

第四章――セレウコス朝の支配と農民身分の変化に関する古典学説は、次の三つのシェーマに整理される。(1)王領における農民は農奴身分であった。(2)ギリシア都市に編入されると、農民は自由人のカトイコイ、パロイコイとなった。(3)セレウコス朝は、都市領を拡大する政策をとることによって、間接的に農民身分の変革を推進した。これらを検討すると、(1)については、王領農民ラオイは、ムネシマコス碑文などの分析から、農奴ではない。次に、セレウコス朝による土地の下賜・売却を、都市領の拡大による王国再編政策とみる見方は根拠に乏しく、(3)も成り立たない。(2)についても、身分が向上した、といえる根拠はない。このように従来の通説は支持しがたい。他方、解体することなく存続していった村落社会が、自発的にギリシア文化を摂取し、後の史料にみられるギリシア的自治組織・制度を取り入れていった可能性はみなおされてよい。

第五章――セレウコス朝王国の国力がいかほどのものであったかという問いを、この国の支配下において、オリエント人はどのように登用され、どのような役割をはたしたのか、という視角から検討する。この点についてハビヒトらの通説は、アレクサンドロス大王がとった民族協調路線はその死後一掃され、オリエント人が顕職につくことはまずなかった、というものである。しかし、アンティオコス三世の時代に焦点をあて、王の臣下をプロソポグラフィアによって詳細に分析すれば、オリエント人はけっして疎外されていなかったことが明らかになり、通説は成立しない。つづいて、彼のオリエント諸地域やギリシア都市に対する対応、軍隊構成を分析した上で、以下のように結論する。アンティオコス三世にとっては、王国内の諸力を総動員してでも国威発揚をめざすというのが第一義的問題であった。ポリスの特権の保護をうたうと同時にオリエント人を採用している事実は、民族の差異が絶対的なファクターではなかったことを示すが、オリエント人の登用は政治的思考の所産であり、それ以上のものではなかったようにみえる。

小括――セレウコス朝がオリエントを変えたとみることはむずかしい。少なくとも王朝の立場のうちに、そのような動機をみとめることはできそうにない。セレウコス朝支配期のオリエントにおけるヘレニズムとは何であったのか、という問題は、オリエントのひとびとにとってヘレニズムとは何であったのか、というかたちで問いなおすべきであり、この観点からの検討がぜひとも必要とされる。

第二部第一章――ヘレニズムのとらえかた全般にかかわる問題点――地域の多様性、史料の偏在からくる制約、ギリシア文化の伝統に立つことを自負する欧米人のヘレニズム観、文化的影響の評価の基準が一定しがたいこと――をまず確認する。これらをふまえて、第一部小括で設定した課題を追求するために次の方針をもつ。(1)ギリシア文化の影響に関するケイス・スタディを試みる。(2)史料の偏在からくる論証の限界に考慮する。(3)文化変容論の立場から、オリエントのひとびとにとってヘレニズムとは何であったか、という視点を重視する。

第二章――八〇頁近くにわたって、リュキア・クサントスの文化について考察する。前六世紀後半から前四世紀半ばまでの造型芸術――「ハルピュイアイの墓」「ネーレウスの娘たちの廟」「パヤヴァの墓」など――では、オリエント的な主題にギリシア的な表現が用いられている。しかし、これは、おそらく異国風をよろこぶ域を出なかった。ところが、前三三七年（前三五八年説をとる者もまだいるが）のリュキア語・ギリシア語・アラム語三言語併用碑文からは、国制の変化が窺われ、少なくともギリシア・ポリス的国制を導入する下地は十分にできていたといえる。これは、従来の造型芸術の例などとは格段の差がある文化変容である。そしてアレクサンドロス大王以後、リュキアでは、ギリシア語やギリシア・ポリス的な制度が普及し、またリュキア都市連合が形成・発展していく。これらのギリシア化は前三世紀に顕著であるが、プトレマイオス朝の統治方針によるというより、リュキア人が自発的に選びとった道であった。

第三章――ペルシア帝国治下におけるリュディアの中心都市サルデイスでは、狭義の文化面に関していえば、伝統が存続すると

ともに、ギリシア文化も抵抗なく受けいれられていった。他方、政治体制では、ヘレニズム時代初期にいたるまではギリシア的な特徴は認められないが、前二一三年の碑文ではサルデイスは一転して典型的なポリスの相貌を示す。前三世紀にギリシア化の進展がみられたことは明らかである。しかし、この変化にリュディア人がどう関わったかは不明である。次に、視角を変えて、宗教面をみてみる。「バラタテスのゼウス信者への布告碑文」などの内容を検討して、以下の結論を得る。ヘレニズム時代、ギリシア神信仰への傾斜が強まるが、土着信仰も生きつづけ、ローマ時代にはふたたび優位が逆転する。しかし、二種の信仰は、どちらもリュディア人自身の選択として評価されるべきである。ただし、土着信仰が復活しても、碑文はギリシア語で書かれており、ギリシア文化の影響が深いものであったことも事実であった。

第四章――ユダヤ人とヘレニズムについて、ユダス・マッカバイオスの反乱を手がかりに考察する。まず研究史をたどり、ついで「第一・第二マカベア書」の史料としての限界を指摘した後、カスル・エル・アブドなどの考古学の成果をもとに、当時のユダヤ人の改革派・保守派をめぐる状況を以下のように推測する。ユダヤ人の中には、ユダヤ教徒の立場を守りながら新しい時代のユダヤ教のあり方をあらためて考え、ある程度まちをギリシア風にすることもやむをえないなどとする改革派と、これに反対する保守派とが対立していた。前者はセレウコス朝に、後者はプトレマイオス朝に後盾を求めようとし、対立が激化して内乱に向かっていく。これが反乱前夜の状況ではないか。

第五章――バビロニアのウルクに関して、粘土板文書はウルク全体を代表していない可能性が、なお残る。ウルクはギリシア化していた、というサルキシャンやマケワンの研究は論証不足である。粘土板文書でみる限り、ギリシア化は弱いものであるが、史料の性格によるところも大であり、小さくとも意義ある変化に注目する必要がある。粘土板文書にも登場するセレウコス朝の官職、後一一一年のギリシア語碑文にみられるギリシア的顕彰方法の継承、セレウコス朝暦の定着などは、ギリシア的なものが無力ではないことを示す。しかし、ウルクのひとびとにとってそれがどのような意味をもったか、についてはまだ答えられない。

むすび――「ヘレニズム」について考えるためには、本書で試みたようなケイス・スタディを積み重ねていくことが必要である。また文化の変容ということの持つ意味も確認しておく。ギリシア的なもの、が受けとめた側にどのような意味があったのか、その多様な意味あいの内実を問うことは、文化の特質、時代そのものを問うことにつながるのである。

以上の要約からもわかるように、本書は広範かつ多彩な内容を含んでいる。扱われる地域・文化要素、双方ともまことに多様である。巻末の文献目録（これは主要なもののみ）をみるだけで、著者の学識と努力がしのばれる。

著者が扱う文字史料はギリシア語のものが中心であるが、その他の現地諸言語史料に関しても研究史をきちんと押えている。ギリシア語史料もその大多数は現地同時代史料であり、本書の実証的な研究を支えている。

ギリシア文化を、受けとめる側から考察しようとする本書の方法は、当り前に思えるかもしれない。しかし、一六四頁で引用さ

れる、三十年ほど前のビッカーマンの言葉、「わたしたちが、東方に勝利したギリシア人の側に立つのは、自然であり当然のことであります。……なぜなら、わたしたちは皆〝ヨーロッパ〟文明の子なのですから。」を思い起こせば、その重要性を強調しすぎることはないだろう。この視点は、昨年出た、有益な指摘を多く含む重要な研究書、S. Sherwin-White und A. Kuhrt, *From Samarkhand to Sardis: A new approach to the Seleucid empire*, London 1993, でもほとんど追求されていないのである（もっともこの書は「ヘレニズム」ではなく「セレウコス朝」を対象としているが）。

まとめて言えば、多様なギリシア文化受容のあり方を実証的に示している、という点が本書の大きな特徴であろう。

また、もう一つ見のがしてならない点は、本書が、従来我が国で全く焦点があてられなかった地域を扱っていることである。リュキア・リュディアに関する章は、その意味でまことに画期的であり、概説、研究案内をも兼ねるものとして、今後利用されていくことだろう。

さて一方、全体を通して疑問に感じた点もいくつかある。

まず、タイトルほかに頻出する「オリエント」「オリエント人」について。これらの語を用いるのがいけないとは言わないが、何を意味するか、何故あえて用いるのか、きちんと説明すべきではなかったか。もっとも、「オリエント」という語は、古代西アジア研究者自身もよく使い、また、サイード『オリエンタリズム』を最も真摯に受けとめているはずのイスラム時代研究者ですらいともあっさりと「古代オリエント文明」、などと言っているのであるから、著者を責めることはほとんどできない。

次に、本書は、ギリシア側が「オリエント」から受けた影響について触れていない。この扱いは、本書を散慢にしないためにも絶対必要な措置であり、それによって本書が成功していることは評者も認める。評者が気になったのは、扱わない理由である。著者は第一部第一章で「『東西融合』の論は、論としてはひろく知られてきたにもかかわらず、それを裏づける材料がいっこうにふえていない。」と述べる。本当にそうなのだろうか。評者が「ヘレニズムの遺産」と聞いてまず思い浮かべるのは、一日を二四分するというエジプト起源の要素と、一時間の下位単位を六十進法で表わすというメソポタミア起源の要素とが、ヘレニズム天文学の下に統合され、現在に至るまで用いられつづけている、という事実なのだが。

三点目に、「オリエント人」がギリシア文化を自発的に受容しようとしたときに、ギリシア・マケドニア人側はどう対応したのか。本書では、ギリシア人側が積極的にギリシア文化を広めようとしていたのではないことはわかる。しかし、一歩進んで、ギリシア・マケドニア人の支配がギリシア文化受容を阻害した、という可能性は考慮しなくてよいのだろうか。著者は別の論稿（『ギリシア文化とヘレニズム文化』、藤縄謙三編『ギリシア文化の遺産』南窓社　一九九三年、五四頁）で「しかし、文化についてみるならば、東方におけるギリシア文化の影響を物語る事例として知られるものに、前一世紀以降の例が少なくないのが気になる」と述べているが、上記の可能性と関係はないのか。

四点目として、著者は、一六四頁で、文化変容のタイプとして

「同化」、「併存」、「借用」ないし「修正」、「混淆」ないし「融合」、「反発」ないし「排除」をあげているが、このうちの「反発」「排除」にあまりスポットが当たっていないようにみえる。史料不足はよくわかるが、たとえば、パレスティナの章ではこちらに焦点をあてて記述することも可能だったのではないか。

最後に、本書第二部を読んで、評者はギリシア文化の多様性を強く感じた。他の人々に受容されやすい文化要素もあれば、されにくい要素もある。「ギリシア文化」と一括せずに、どの要素がどのように受け容れられていったのか、という視点で実際に第二部の各章（とくに第二章）は記述されており、「むすび」でそれを確認したほうがよかったように思える。

以下は、評者の専門からみて、細かな訂正や補遺を施すことができる箇所である。

六〇頁以下、第一部第三章全体。略号ＩＰが巻末略号表から抜けているが、これはもちろん六二頁註３の Hiller von Gaertringen (hrsg.), *Inschriften von Priene*, Berlin 1906, である。

一六一頁。〔楔形文字史料以外の〕「アラム語その他の言葉で書かれた史料は、皆無ではないが五本の指で数えられる程度」と述べられているが、死海文書やフェニキア語碑文を考慮すれば、これはいかにも少なすぎる。ただし、数が少ないことは間違いない。

一九九頁。「刻文石柱」で「リュキア語の別の方言」とされている言語は、現在では「ミリア語」と呼ばれている。大城光正・吉田和彦『印欧アナトリア諸語概説』大学書林　一九九〇年、六―七頁参照。

二三〇頁以下。「三言語併用碑文」のリュキア語版は、『印欧アナトリア諸語概説』二三三―九頁にも収録（語注付）。

同碑文中、「Khbide の王と Arkkazuma 王」は、国制上の王ではなく、神であることを注記した方がわかりやすいのではないか。

同じく、「国守となり」は、原語では「サトラペスとなり」であることを示すべきではなかったか。

二五六頁。リュディア・サルデイスからはアカイメネス朝下のアラム語の碑文はまだ発見されていない、とあるが、評者の知る限りでもリュディア語・アラム語二言語碑文が出土している。E. Littmann, *Sardis VI. Lydian Inscriptions, Part I*, Leiden 1916, frontispiece and pp. 23-38（評者未見）; E. Lipinski, *Studies in Aramaic Inscriptions and Onomastics I*, Leuven 1975, pp. 153-61. この碑文のリュディア語版は『印欧アナトリア諸語概説』二五六―八頁に収録。

三三三頁他。LÚ. UKKIN は *pulru* ではなく、*kinišu* と読む説の方が有力である（cf. R. J. van der Spek, The Babylonian City. In: A. Kuhrt and S. Sherwin-White eds., *Hellenism in the East*, Berkeley and Los Angels, p. 61）。

三四四頁。LÚ. GAL のみでタイトルを表わし、これがストラテゴスにあたるとするフンクの説は支持されていない（cf. L. Timothy Doty, Nikarchos and Kephalon. In: F. Leichty, M. de J. Ellis and P. Gerardi eds., *A Scientific Humanist: Studies in memory of Abraham Sachs*, Philadelphia 1988, p. 98 n. 17）。

西アジア史を研究する際、ヘレニズム文化の影響を過大にみることはもちろん戒めなければならない。しかし、逆に「ヨーロッパ中心史観」に反発するあまり、極端に過少評価することも避けなければならない。例をあげれば、現在も一部の国で使われている通貨名ディルハムは、名称の上では、セレウコス朝時代のドラクマ貨を連綿と受けついできたものである。また、セレウコス紀元は、イスカンダル（アレクサンドロス）紀元と名を変えて、はるか後世にまで用いられた。このようなおそらく重要な意味をもつであろう「ヘレニズム」を、文化を受けとめる側からとらえようと試みた本書は、今後の研究の確かな指針になると思われる。

（A5判　一二＋三五八＋二八頁　一九九三年五月
ミネルヴァ書房　六〇〇〇円）

（東海大学文学部講師　　）